

---

# エンドレス・ゲート・オンライン

ころみごや

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

エンドレス・ゲート・オンライン

### 【Nコード】

N7539X

### 【作者名】

ころみこや

### 【あらすじ】

エンドレス・ゲート・オンライン 通称EGOは、稼働を始めてから一年が経過していた。その間、世界中で百万人以上の人々がEGOにログインし、MMORPGならではの仮想世界を楽しんでいた。ルピスタ「タスピール」もまた、彼らと同じく、EGOへのログインを試みた。だが、EGOにはもう一つ、別の顔が存在した。目を覚ましてみれば、ルイは真つ暗な空間へと転移し、辺りには大勢のモンスターが潜んでいた。そして、ルイの許へ届けられた一通のメッセージ。そこに書かれてあったのは……。

【0・0】

囚人が一人、失命した。

食欲旺盛な悪魔に囲まれたのが運の尽きだ。

命の証<sup>あかし</sup>を失い、肉塊と成り果てた囚人の許に群がり始めたかと思えば、四散を赦すことなく手足を引き千切り、頭の上から指の先まで、跡形も残さずに食い散らかしていく。

意識を失うことが出来れば、或いは多少の救いがあつたのかもしれない。けれどもその囚人は、自身に群がる悪魔どもの牙や爪によつて、拷問にも勝るとも劣らない恐怖と絶望を脳に植え付けられ、縊り殺されたのだ。痛かつただろう、苦しかつただろう、辛かつただろう。

そしてまた、その囚人は、今から七日後に二度目の死を迎えなければならぬ。たつた今、死のカウントダウンが幕を開けたのだ。記憶の引き出しに鍵を掛けていないとすれば、わたしはその囚人の名前を知らないし、言葉を交わしたこともないはずだ。つまりは、大切な人を失つたわけではないのだ。

それなのに、何故、わたしは泣いているのだろうか。

「……っ」

次なる標的を決めた悪魔どもは、ゆつくりと黒羽を羽ばたかせながら距離を測り、わたしに向けて下卑た笑いを浴びせる。鋭く尖つた爪には彼の血がこびり付き、肉片が挟まっているに違いない。想像するだけでも吐き気を催しそうになるが、喉を通る前に強引に押し戻し、逆流を拒絶する。これも全ては意識的なものでしかないけれども、無理やりにも鼓舞しなければ戦えないし、立ち向かうことも出来ない。

でも、だからこそ、わたしは自分に言い聞かせる。

「わたしは死なない、……絶対に、死ねない……っ」

目の前に立ちはだかる現実から目を背けてはならない。そんなこ

とをすれば、此処ではあつという間に死することになる。全神経を研ぎ澄ませ、敵の動きに集中しなければ、次に殺されるのはわたしだ。こんなところで死んでたまるものか。

「絶対に……生き残ってみせる……」

黒衣を身に纏ったわたしは、左手を横に伸ばして肩の高さへと上げる。

直後、鈍い輝きを放つ黒い鎌が何もない空間に形成し、左腕に巻きついていく。

黒い鎌を視界に映し、悪魔どもは臨戦態勢を整えるが、その姿を視認することなく、わたしは誰にも聞こえないようにそつと呟いた。

「だから、わたしを恨まないで」

一秒後、悪魔ども目掛けて、わたしは死神の如く空を駆けていた

…

## 【1・1】

黒から白に、瞼の裏が変化する。

静寂と暗闇に整われた空間に、不躰にも調和を試みたものの、釣り合いを保つには些か眩すぎたらしい。我慢の限界を早々に見極め、瞑っていた瞼をおずおずと開いてみると、だだっ広い空間が視界に映し出され、生まれたてのアバターを出迎えてくれた。

見たことのない造形が視覚に訴えかけ、3Dオブジェクトが見事なまでに空間的形象を表現している。仮想世界とは思えないほどの精巧な作りが施された空間は、各プレイヤーに現実世界との境目を曖昧にし得るであろう迫真性の再現に成功していた。

息を吸い、緩やかに吐いてみる。

何気ない動作一つを取ってみても、此処が如何に優れた技術によって生み出されたのかを認識し、同時に驚嘆することができた。

生まれながらに人が持つ五つの感覚のうち、視覚、聴覚、嗅覚、味覚に携わる神経細胞のエクスポート技術を可能とするデータベースプログラムが開発されたことによって、今現在、オレが存在する仮想世界 エンドレス・ゲート・オンライン 通称？EGO？は、知覚を除く全ての感覚を感じ取ることが可能なMMORPGとして、コンピュータネットワーク上に稼働し、電子回路の海を彷徨い続けている。他にはないシステムの構築、その導入によってEGOが現実世界において多大なる支持を得たのは、もはや自然の摂理とも言えるだろう。

だが、不可解な点が一つ。

「……此処、何処なんだ……？」

黒を基調とした空間は、おどろおどろしい装飾が室内を染め上げるかのように飾り付けることによって、過剰な不気味さを演出していた。

オレは今、生まれて初めてEGOにログインしたわけだが、この

場所が勇者軍の城下町ではないことぐらいは理解できる。

E G Oに初めてログインしたアバターは、勇者軍が陣地とする城下町へと強制的に転移し、チュートリアルを担当するNPCノンプレイヤーキャラクターによって初歩の動作から行動に至るまで、一つ一つ丁寧にレクチャーされるはずなのだが、おかしなことにNPCの姿が見当たらない。そればかりか、室内には他のプレイヤーが一人もいなかった。何処と無く怪しげな雰囲気漂っているようにも思えるが、これではまるで魔王軍の城内に迷い込んでしまったみたいだ。

「誰も……いないのか？」

どうやらオレのアバターは椅子に腰掛けていたらしい。肘掛け付きの豪華な椅子は床に固定されていて、背には弾力性のある柔らかな素材が使われていた。

「初期装備にしては随分と質がいいみたいだが……」

徐おもむろに椅子から立ち上がると、両肩から腰の辺りまで、そして足の先まで、至らぬ限り全身を見回してみる。黒に染まった外套のようなものを身に纏い、加えて服装から履いている靴に至るまで、全てが黒に統一されていた。

「暗闇に同化しそうな装備だな……」

眉ひそを顰め、嘆息を漏らす。

想像していたものとは異なる状況に、思考が追いつかなくなっているようだ。

「ん……、扉か？ あれが初めの門ゲートなのか？」

視線を前に戻すと、鈍い輝きを放つ扉を見つけた。多少の距離はあったが、オレが腰掛けていた椅子と向かい合う場所に入り口が用意されていたらしい。一先ず、この部屋から抜け出して、チュートリアル担当のNPCを捜し出さなければならぬだろう。それでも見つからない場合は、一旦ログアウトして説明書を読み直すことになりそうだ。

少々強引にだが自分自身を納得させると、オレは扉の前へと移動してみる。

地を踏み、体を動かし、歩を進める。知覚は存在しないはずなのだが、現実と変わらぬ皮膚感覚を認識し、衣類と靴による確かな肌触りを手ごたえとして感じ取った。これは現実か？

黒に塗られた鉄扉の握り手を左右の手で一つずつ掴み、腕に力を込めて押してみる。オレの手に反応し、鼓動するかのように鉄扉が黒から赤に、そしてまた黒に染まり返っていく。

「おわ……、つと」

錆びの付いた効果音を室内に響かせながら、少しずつ鉄扉が動き始めたかと思えば、やがてオレの力を借りることなく独りでに開いていく。これもE G Oのシステムによるシナリオの一部と考えてもいいのだろうか。それにしても初期の段階から凝った演出をするものだ。

だが、オレの思考はすぐに遮られることになる。

あろうことが、鉄扉の向こう側には大量のモンスターが待ち構えていた。

「お……おいおい、なんだよこれ……一体全体どうなってんだ……」  
目を疑いたくなる光景に、オレは思わず半歩後ずさる。まさかいきなりモンスターとの戦闘をこなさなければならぬわけでもあるまい。下手すればチュートリアルに出会う前に死亡することになるぞ。たとえE G O初心者だとしても、そんなみつともない死に方は御免だ。

「扉が……開いただと？」

すると、モンスターの群れの中心から細く尖った声が聞こえてきた。声の主は驚きに満ちているのか、ありえないものを見てしまったかのような表情を作り、オレの姿を視認する。

人型の姿を成したモンスターは、恐らくは人狼の種族に属しているのだろう。狼のような顔で人語を扱い、人間と同じように衣類を身に着けていた。しかもそれだけでなく、拳銃には武具まで装備していやがる。E G Oではモンスターにも武具を装備することができるのか。

「ッ」

予想外の展開に焦りを感じ始めたが、突然、上部に黒い影が差し込んだ。

「よおー、お前さん見ない顔だな？　どうやってそこに入ったんだよ？」

陽気な喋り方で頭上から話しかけてきたのは、赤銅に輝く両翼を左右に広げ、宙を旋回するモンスターだった。その姿形から察するに、このモンスターは悪魔族に属しているに違いない。

両翼の先端には鋭く尖った棘のようなものがあり、触れただけでダメージを受けてしまいそうだ。両翼を含めれば、全長三メートルは優に超えているだろう。空を移動可能な悪魔を前にして、もはや逃げる場所は何処にもない。絶望が支配しつつある状況に、オレは情けなくも尻餅をついてしまった。

「……あ、悪魔も……言葉を話すのか……っ!？」

「うはは、話しちゃ悪いってのか？　お前さんだつて話してるじゃねえかよ、なあ？」

頭上で風を切り、ぐるぐると弧を描き続ける悪魔は、人狼と同じように人語を話したかと思えば、人間と差ほど変わらぬ容姿を持ち合わせてもいた。人型に近い姿を持つモンスターは、人語を話せるシステムにでもなっているのか。

「ヨシル力、邪魔」

人狼と悪魔が人語を話すことに驚きを隠せないでいると、更に別のモンスターの声が耳に届く。少し低めだが、けれども女性特有の美しさを含んだ声の持ち主は、既に鉄扉のそばに佇<sup>たたず</sup>んでいた。

「へいへい、すまねえこった。アンノルには逆らえねえからなー」  
「そこを退いて」

優しさと柔らかさを欠いた、淡々とした口調で話すのは、黒衣を身に纏った女性だ。

声だけでは断言し辛かったものの、フードの奥に見え隠れする人物は、明らかに女性と認識可能な容姿をしていた。しかし、彼女に



もまた人狼と悪魔のように驚くべき特徴があった。

「……う、浮いてる？」

両翼を介し空を舞う悪魔とは異なり、彼女は身動き一つせずに二十センチほどの高さに浮いていた。ふわりふわりと漂うわけでもなく、まるでそれが当たり前のことのような印象を受ける。身に纏う黒衣はやけに大きめで、体格には合っていないらしく、異様なほどに裾が長い。

ほんの少しだけ顔を覗かせる爪先つまさきの存在によって、上半身のみのもンスターではないことは理解できる。ただ、それではまだ不十分だ。此処にいるということはつまり、彼女もまた彼らと同じようにモンスターの仲間なのだろう。オレはまだ、彼女がどんな種族のもンスターなのかを見破ることができないでいる。

「浮いているのが、そんなにおかしい？」

風を切らずに音もなく距離を縮める彼女は、深めに被っていたフードを取ってみせると、表情を変えることなく小首を傾げてみせる。そこで改めて、オレは彼女の素顔を捉えた。

「わたしの名前は、ロア・アンノル。見ての通り、死神族のアバターを選択したわ」

「死神族のアバターだって？」

死神の姿を成した彼女　ロア・アンノルは、ほんのりと蒼が差した黒髪をしている。後ろ髪を短めに切り揃え、前下がりに髪の長さが整えられているのが印象的だ。

両耳は髪に隠されていて、それなりに伸びた前髪が赤に染まる瞳をほんの少しだけ隠してしまうのが残念だが、彼女の特徴的な髪型の性質上、うなじはしっかりと見えているはずだ。背後に回り込む機会があれば、是非一度この目で確かめてみたくなる。……いや、待て。モンスターを相手にオレは何を言っているんだ。

「死神族のアバターなんて初期設定時の選択項目には入ってなかったぞ」

もしかすると隠れアバターの可能性も無きにしも非ずだが、ログ

インして早々にお目に掛かれるほど甘くはない。それ以前に、不可解なことが多すぎて頭が混乱しそうだ。

「それに……なんでお前には名前があるんだ？　MOBモンスターが特定の名前を持つなんておかしいだろ」

通常、NPCの中でも敵を表すMOBモンスターには、各々の形体によって呼び名が存在する。チュートリアルを担当するNPCにクエストの進行に携わるNPC、更にはEGOに於けるボスマンスターなど、NPCの形態は様々だが、総称とは別に特定の名前を持つMOBモンスターは限りなく少ない。個体ごとに意識を持って言葉を交わし、拳句には自らの意思に従い行動を取るなど、もはやそれはNPCやMOBの領域を超えているので、一人のプレイヤーとして認めても遜色ないと言えよう。

だからこそ、解決することのできない問題が浮かび上がってくる。彼女は、一体何者なのか。そして先ほどの人狼と悪魔も同じく。

「わたしがMOBモンスター？　……それはジョークではなく、真面目に言ってるの？」

少し呆れ顔になった彼女は、小さく息を吐く。その後ろでは、天井付近をぐるぐると旋回する悪魔を筆頭に、モンスターの笑い声が其処彼処から溢れ出し、耳を劈いた。

「なっ、なんだよ、何がおかしいんだっ」

尻餅をついたまま、オレは声を荒げた。意味も分からずに笑われてしまい、恥ずかしさから頭に血が上っていく。できることなら、今すぐにでもこの場から逃げ出したかった。それもこれも全ては現状が物語っているとやるだろう。

たとえ今此処でログアウトを試みたとしても、新たにログインする際にアバターが出現する場所は変わらない。言うなれば、オレには逃げ場など存在しないのだ。

一つの命を守り切り、生き残ることを半ば諦めているからこそ、モンスターを相手に反論するような間抜けな行為を実行に移せるのだろう。だがしかし、目の前に立ちはだかる大量のモンスターにま

ともな抵抗一つできずに死んでしまうのであれば、次に活かせるように少しでも情報を得ておきたいところだ。

そんなオレを見かねたのか、ロアは宙に浮きながら限界まで近づくと、そつと、手を差し伸べてきた。立ち上がるように促しているのだろう。

それがまた羞恥に拍車を掛け、思考が暴走を始める。モンスターの手助けなど借りるものか。

ロアの手を振り払い、オレは一人で立ち上がってみせた。

「……その様子では、三日間生き残れば大したものね」

折角の好意を無下にされたというのに、ロアは機嫌を損ねることもなく、冷静にオレの様子を分析に掛かる。

「生き残るって…… 此处でか？」

反問し、ロアが頷く姿を確認する。口を開く前に一旦後ろを振り返り、全体に視線を流していく。途端に、声を上げて笑っていたモンスターたちが静まり返った。

ひょっとすると、ロアはボスモンスター級のNPCなのだろうか。だとすれば、安易に歯向かうような態度を取れば、あっという間に殺されかねない。しかしながらロアをNPCとするには自らの意思を持ちすぎているし、そもそもNPCがプレイヤーの態度によって意見を変えるなどあり得るのか。まるで矛盾が頭の中を蝕んでいくかのようだ。

役に立たない思考を中断し、こちらを向き直すロアの赤い瞳に視線を向ける。

「ステータスが低い者は、此处では生き残ることが困難と言えるわ。たった一度でも死んでしまえば、あなたもわたしもその時点でゲームオーバーとなるんだから、時には形振り構わず助けを乞いなさい。囚人と言えども、わたしたちは皆仲間みななんだから」

「……囚人？ オレが？」

残念なことに、オレにはロアが何を言っているのか理解することができない。EGOに初めてログインする初心者プレイヤーとはい

え、あまりにも情報が不足している。

いや、それはともかくとして、彼女は聞き捨てならない言葉を口にしていた。

「一度でも死ねばゲームオーバーって、どういうことだ？」

E G Oでは、インターネット上にて発売されたデータプログラムを購入した者にI D Cチップと呼ばれるものを発送している。I D Cは子供の掌に収まる大きさだが、その中には膨大な量のデータが含まれていて、それを基にE G Oの公式サイトでアカウントを取得することが可能だ。

ログイン前に目を通した説明書によると、E G Oでは一つのアカウントに付き、三つのアバターを作成することが可能となっているのだが、E G Oには他のM M O R P Gとは異なる点が存在する。それは、一つのアカウントに付き、作成したアバターの数に関係なく二回しか死ぬことができないことだ。

作成したアバターが一つなら、二度の死をやり直すことができるが、三度目の死を体験したアバターはE G Oにおいてゲームオーバーとなり、強制的にアカウントを消失してしまう。

また、メインアバターの他にサブのアバターを一つ作成しているプレイヤーの場合、メインとサブのアバターによって、既に二つの命を扱っていることになるので、どちらかのアバターが二度目の死を体験し、残る一つのアバターが死してしまえば、アバターを一つしか作成していないプレイヤーと同じようにアカウントが消滅することになる。

このシステムの存在によって、E G Oのプレイヤーの九割以上が一つのアバターしか作成しておらず、サブのアバターを作成するプレイヤーは変人扱いされるほどだ。プレイヤー同士で殺し合うP Kシステムも採用されているE G Oにおいて、高額を支払い購入したI D Cが三度の死により塵と化すシステムには賛否両論の声が上がっているが、逆にこのシステムが存在するからこそ、E G Oのプレイヤーは命を大事にし、常に危険と隣り合わせのスリルある仮想世

界を満喫しているのも事実だった。全世界で絶大なる支持を得て、総アカウント数が一千万を超えたのも納得せざるを得ないだろう。

「……あなた、本当に何も知らないの？」

目を疑うものを見てしまったかのように、ロアは眉間に皺を寄せていく。

E G Oのプレイヤーであれば誰もが知っているであろう三つの命のシステムを、ロアは知らなかった。否、知らない振りをしてオレを騙そうとしているんだ。

たった一度でも死ねばゲームオーバーとなり、アカウントを消滅させられると嘘を吐いて、E G O初心者のオレを脅かして、そして……それから、どうするんだ？

そんな嘘を吐いて、彼女たちに一体何の得があるんだ。

ロアの瞳は、真っ直ぐにオレの姿を捉えている。嘘を吐いているようには到底思えない。

まさか、本当に……。

「まあ、別にいいわ……。それよりもまず、あなたに聞いておきたいことがあるの」

「聞きたいこと？」

ログイン早々、何らかのクエストが発生したのか、ロアは自分の瞳に映るものをオレの後ろへと移した。

「その扉、どうやって開けたの？」

顎の先で指すのは、黒色の鉄扉だ。その言葉を合図に興味の対象が移ったのか、ロア以外のモンスターたちも皆一様に鉄扉に向けて視線をぶつけている。

「鍵なら掛かってなかったぞ」

「嘘言わないで。あなたが出てきたその部屋は開かずの間と呼ばれているのよ？ この一年間で誰もその扉が開いたところを見たことがないわ」

その言い方から察するに、部屋の外側からは入ることができなかったらしい。とはいえ、鍵が掛かってなかったのは事実だ。確かに

見た目は重そうな扉はあるが、押してみれば呆気なく開いてしまった。

「今見ただろ、扉が開くところを」

「っ、それはまあ……確かにそうだけど……」

ロアは納得のいかない様子ではあるが、目の前で起こった現実をありのままに伝えたまでだ。

「そもそもだな、EGOに初めてログインするプレイヤーに対して、EGO内で起こった現象について質問されても、オレはまだ説明書に目を通したただけなんだから何も分からないぞ」

オレが質問をするのが当たり前であって、されるのは明らかにおかしい。EGOでの案内役を務めるNPCは一体何処にいるんだ。もしかしてロアがチュートリアルとでも言うつもりか。

「あ、あなた……今初めて、EGOにログインしたの？」

今までは冷静さを保っていたロアが、大げさとも言える反応を示す。しかもそれはロアだけではなく、オレとロアの話聞いていた沢山のモンスターが揃いも揃って同じ反応を取った。

一体全体、彼らは何に驚いているのか。EGO初心者のおレには、それすらも理解できない。

「……お、おう。そうだけど……そんなに驚くことか？」

テストが終了し、EGOが稼働を始めてから一年が経過した今現在、オレは自宅でEGOのIDC<sup>チップ</sup>を発見し、アカウントを作成した。

EGOでは、初期設定の段階において様々な選択肢を迫られ、回答を義務付けられている。

性別、体格、容姿、これらはエクスポート時に自動的に認識され、属性と種族の項目に関してはプレイヤーの好みによって選択し、それぞれの属性と種族により、特定の特技と魔法を習得可能なシステムだ。

IDCをコンピュータ上にエクスポートして初期設定を終えると、IDCは自動的にデータを消去する。これは登録したプレイヤー以

外には扱うことができないようにするためだ。

その後、コンピュータ上でE G Oを起動し、I Dとパスワードを入力すると、強烈な電波信号が脳に送り込まれ、半睡眠状態へと陥る。その状態において、プレイヤーの意識だけがE G Oに転送され、現実とは異なる仮想世界を満喫することができるようだ。快適な環境でプレイするために、現実世界のオレは部屋のベッドで横になっている。はたから見れば睡眠を取っているようにしか見えないので、勉強の息抜きには丁度いいだろう。

また、E G Oからログアウトする際には、E G O上でウィンドウを開いてコマンドの入力を実行に移せばいい。それ以外にも、E G Oにログインしている状態で現実世界の体に触れると、人体への危険を察知し、強制的にログアウトするらしい。まだ一度もログアウトしたこともなければ、ウィンドウを開いたこともないので、試すべき行動は沢山ありそうだ。

「それじゃあ、此処が何処なのか……知らないの？」

「勇者軍の城下町だと嬉しいんだけどな」

あからさまに溜息を吐き、何がどうなっているのか分からないと言いたげな態度を取った。

もはや、此処が勇者軍の陣地ではないことぐらい理解している。ログインすると同時に黒い部屋に出現したかと思えば、数え切れないほどのモンスターに遭遇し、逃げ場を失ったんだからな。あまり考えたくはないが、察するに此処は魔王軍の陣地内かもしれない。どうやらオレはとんでもない場所に飛ばされてしまったらしい。こんな状況では幾ら命があろうとも足りるわけがない。ログインする度に髑り殺されるのが目に見えている。

そんなオレの考えを見透かしたのか、ロアは至って真面目な表情で話を続ける。

「此処はね、魔王軍の陣地にある魔王城の城内なの。……そして、あなたがいた部屋は」

王の間。

ロアは、そう口にした。

魔王城の城内であろうことは薄々気づいてはいたが、しかしまさかオレが飛ばされてきたところが王の間だとは予想だになかった。「此処が、王の間……」

後ろを振り向き、室内の様子を改めて見渡してみる。そう言われてみれば確かに、魔王が坐するに相応しいとも思える黒々とした雰囲気作り上げられていた。

しかしそうになると、オレが座っていた椅子は話の流れから察するに玉座になるわけだ。室内が暗すぎて、鉄扉を開けてまともな光が差し込まれるまで気付かなかったんだろう。先ほどは目に付かなかったが、3Dオブジェクトによって映し出された装飾品の数々が、無造作に床に転がってもいた。

「魔王軍と勇者軍にはそれぞれ？王の間？があつて、魔王軍には魔王が、そして勇者軍には王様が、王の間の主として存在するわ。…」

…だけど、魔王軍の王の間には魔王が存在しないの」

「魔王が……存在しないだと？ それじゃあどうして王の間が存在するんだよ」

ただ、なんとなく設置したわけではあるまい。それなりの理由があるはずだ



## 【1 - 2】

「アンノル、説明を代わろう」

とここで、選手が交代する。

ロアに変わって、人狼の姿を成したモンスターがオレの前に立つ。宙に浮く死神のロアは、それほど身長は高くなく、天井に張り付く悪魔も両翼を除けばオレと変わらないほどだが、今現在、オレの目の前に佇む人狼は、三メートルを超えているだろう。

「まず、自己紹介をしてもいいかな？ 私の名前はローランド」ベイクルアだ。宜しく」

「お、おう……」

恐ろしげな外見からは想像し辛かったが、人狼　ローランドはベイクルアは、目元を緩ませ、握手を求めてきた。友好的な素振りに戸惑いつつ、オレはローランドの手を握り、握手を交わした。

「ルイピスタタスピール。それがオレの名だ」

EGOにログインして、オレは初めて自分の名前を口にした。

但し、相手は人間じゃない。モンスターだ。

「ふむ、タスピールか。……なるほどね」

オレの名前を耳にして、ローランドは口の端を右に左に動かしながら反応する。

「これはあくまで私の推測でしかないのだが……タスピール、キミはEGOにログインする際、初期設定においてアバターを選択することができなかったのではないかな？」

「……なんで、それを？」

図星だった。

オレは自宅で見つけたIDCを利用して、EGOのアカウントを取得するために公式サイトを調べた。IDCに記載されたIDとパスワードを入力した後、すぐにオレはベッドに横になり、半睡眠状態へと誘われることになった。EGOから発せられる電波信号を脳

細胞が受信する範囲は十メートル強と説明書や公式サイトに書いてあったので、自分の部屋に籠っていればログインするには問題なかった。

だがここで一つ問題が発生する。それは初期設定を終わらせることなくE G Oに飛ばされたことについてだ。

説明書や公式サイトのご案内によると、E G Oを初めてプレイする場合、自身の分身となるアバターの作成を義務付けられているが、それはE G Oにログインすると同時に選択画面が出てくる手はずとなっている。しかしだ、オレがログインした際には、選択画面など一切出てこなかった。その数秒後、目が覚めれば今度は魔王軍の陣地に飛ばされていた。自宅にあったI D Cは埃を被っていたから、もしかすると壊れていたのかもしれない。

「まず、キミが知っているであろう真実は、此処では当て嵌まることはないだろう」

話の内容に眉を顰<sup>ひそ</sup>め、オレは耳を傾ける。

「キミは、私を含めた此処に存在する全てのモンスターがN P CかM O Bであると勘違いしているようだが、それは間違いだ。私を含め、全員が一人のプレイヤーとして生きている」

「えっ、あんたら全員が？」

周囲を見渡してみれば、ローランドの言葉にしっかりと頷くモンスターたちの姿を確認できる。ロアは勿論、空を舞う悪魔も同じように首を縦に振った。

「……で、でも、魔王軍にプレイヤーがいるなんて聞いてないぞ」

公式サイトには、プレイヤーが扱うことが可能なアバターは勇者軍に限られると記載されていたはずだ。それなのに何故、彼らはモンスターのアバターを作成し、E G Oに存在することができるのか。それはな、E G Oのクソツタレ<sup>ゲーム・マスター</sup>GMの野郎どもが、俺ら囚人をテスターとして利用してっからだよ」

話に割り込んできたのは、空から降ってきた悪魔だ。

「えと、確か名前は……ヨシル力だったか？」

「ご名答ッ、よく憶えてたじゃねえか、お前さん記憶力がいいみてーだな」

カカカ、と笑い、地に足をつく。風の音が止んだおかげで、彼ともまともに話ができそうだ。

「俺の名前はレツカス！ レツカス〓ヨシルカだ！ 何の因果か知らねえが、こうして俺とお前さんは出会ったんだからな、気軽にレツカスと呼んでくれや」

悪魔 レツカス〓ヨシルカは、オレの手を強引に掴み取り、ぶん回しながら握手する。

「囚人が テスターって……それ、本当か？」

話の規模が大きくなり、頭が混乱してきた。しかも今、俺らって言わなかったか。

「タスピール、キミはEGOの最終クエストをご存知かな」

「最終クエストって……あの、報奨金が一億ドル貰える奴のことか？」

質問を質問で返し、ローランドの顔を見上げる。

「その通りだ」

肯定し、ローランドは頷いた。

本来、MMORPGには明確な終焉は用意されていないのだが、EGOにはゲームクリアしたプレイヤーに報奨金が支払われることになっている。その額、実に一億ドル。一生遊んで暮らせる金額だ。勇者軍の陣地に作られた？<sup>ゲート</sup>門？をくぐる勇敢な者を、EGOでは総称して勇者と言い表す。

そして、勇者と呼ばれる者たちがEGOに作られた全ての<sup>ゲート</sup>門を制覇すると、ゲームクリアの褒章として？王者の証？と呼ばれるものを<sup>ゲーム・マスター</sup>GMから授与される。これを手に入れた者が、EGOを完全制覇した唯一のプレイヤーとして、現実世界にて報奨金を手にするシナリオだ。

あまりにも高額な報奨金に目が眩んだプレイヤーは少なくなく、たった一人で数十種類のアカウントを使いこなす猛者も中には存在

するらしい。

「それがどうかしたのか？」

「？王者の証？を手にすることができるのは、なにも勇者だけではないということさ」

そう言つて、ローランドは周囲のモンスターを示すように手を向けた。

「王者の？者？は勇者の者、そして王者の？王？は魔王の王……、つまりEGOを完全制覇することが可能なプレイヤーは、勇者軍だけではないということだ」

勇者軍だけでなく、魔王軍にも、ゲームクリアの条件があるらしい。

しかしながら何故、彼らは魔王軍のプレイヤーとして行動しているのか。そもそもどうやって魔王軍のプレイヤーになったのか。

頭を捻り、ロアとレツカスの言葉を思い出す。

「……そういえば、囚人がどうか言つてたよな？ あれはどういうことなんだ」

少し離れた場所で話を聞いていたロアが、再度オレの許へ歩み寄つてきた。

「わたしと、ヨシルカとベイクルア、そして此处にいる全てのプレイヤーは、現実世界では囚人として服役中の身なの」

「……は？」

今度こそ、目が点になった。

思いもかけない告白に、オレは口を開けたまま、ロアと視線を合わせろ。

「これは勇者軍のプレイヤー誰一人として知ることのない、わたしたち囚人にしか話されていない極秘事項なのだけど、EGOの開発メンバーでありGMを務める狂氣的な開発者たちは、EGOで人を殺すことができるか否か試すために、テストの実験台として囚人を利用してゐるわ。……そして、その実験台にされた囚人が、わたしたちよ」

「それはつまり、現実世界にも影響が出るってこと……なのか？」  
恐る恐る真偽を確かめてみると、ロアはしっかりと頷いた。

此処に来てからというものの驚かされることばかりだが、さすがに度肝を抜かれた。

「勇者軍のプレイヤーは、インターネット上で発売されたデータプログラムを購入し、IDCを手に入れることで、EGOにログインすることが可能となる。但し、それは私たちのような囚人ではなく、あくまで一般人を対象としている。つまりキミも、本来ならば勇者軍の陣地に転移するはずだった」

再び、ローランドが話し始める。

オレの姿を瞳に映し込み、憐れむような表情を浮かべている。

「現在、魔王軍で活動する全てのプレイヤーは、服役中の囚人たちだ。そして今、キミも魔王軍の陣地にいるということは、恐らくは何らかのバグによって魔王軍のプレイヤーとして処理されることになったのだろう。初期設定ができなかったのもそれが原因とみて間違いない」

できることなら信じたくはなかったが、現に今、オレは此処にいる。勇者軍の陣地ではなく、魔王軍の陣地に転移し、魔王軍のプレイヤーと言葉を交わしている。たとえ目の前の現実を否定したくとも、彼らが存在すること自体が事実であることを証明していた。

「どうやらキミは私たちと同じ立場ではないようだ。服役中の囚人というわけではなさそうだからね。……だが、たとえキミが囚人ではないとはいえ、魔王軍のプレイヤーとして此処に存在していることは事実だ。よって、EGOの真実を知る権利があるだろう」

それから暫く、オレは彼らの話に耳を傾けることになった。

EGOの開発チームは、テストにおいて、まずは囚人を実験台へと指名した。

EGOでは、IDCによって初期設定を終え、電波信号を受け取り半睡眠状態になったプレイヤーに対し、脳細胞を破壊し尽くす凶悪なウィルスプログラムを送り込んでいる。ゲーム内で死亡した後、

現実世界でも死に至るか否か、それを確かめるために、プレイヤーをワザと死亡させ、七日後に二度目の死を体験させるらしい。

脳細胞に送り込まれたウイルスが活動を開始するには七日間のタイムラグが存在し、それはテストが終了し、EGOが稼働し始めた後、一般人が三回以上死亡した瞬間に現実世界でも死に至らないように偽装し、死因を解明し辛くするのが目的だった。

だが、EGOの本当の恐ろしさは別に存在する。

それは？終焉のカウントダウンシステム？だ。

たとえばゲーム内で死に至らなくとも、一度でもウイルスを脳細胞に送り込まれたプレイヤーは、七日間以上ログアウトをし続けている場合、ウイルスが強制的に活動を始める。

つまりは、EGOの裏の顔を知ったとしても、決して途中で止めることはできないことになる。三度の死を体験するか、王者の証を手に入れるか。二者択一なのだ。それもこれも全ては、脳細胞にデータプログラムをエクスポートする技術が開発されたことが原因と言える。

だが、最も重要なのは、魔王軍と勇者軍の全てのプレイヤーが助かる方法だ。

勇者軍のプレイヤーがウイルスを死滅させ、EGOから解放されるには、全ての門をくぐり抜け、王者の証を手に入れなければならない。

そして魔王軍のプレイヤーが解放されるには、

「EGOにリアルタイムでログイン中の、勇者軍の全てのプレイヤーを殺すことだ」

「そんなの無理に決まってるだろ！EGOは世界中で稼働してるんだぞ？一人残らず殺すなんて不可能だっ」

むちゃくちゃな条件だった。これではまるで死ねと言っているようなものだ。

「不可能でも、やらねばならないのだ……。それにまだ、救いはある。圧倒的に理不尽な条件とはいえ、私たち囚人は勇者軍のプレイ

ヤーを一人殺すたびに、刑期が一日短縮されるのだ」

「……………そ、そのために……………GMに従って、罪もない人を殺すのか……………」

魔王軍のプレイヤーは服役中の囚人のため、どんなに酷い扱いを受けても文句を言うこともできず、GMの指示に従い続けるしかない。それは納得せざるを得ないだろう。だがしかし、ゲーム内で勇者軍のプレイヤーを殺し、現実世界でも死に至らしめることに対し、迷いや躊躇いはないのか。

「否定はしない。直接手を下すわけではないが、事実として人を殺すことに変わりはないのだからな。GMにとって私たち囚人は、都合のいいテスターということだ」

魔王軍の全てのプレイヤーは、たった一度の死により、現実世界でも死に至るように設定されているので、仮想世界とは言えども死に物狂いで生きていかなければならない。

一般人とは異なり、ゲーム内で死ねば現実世界でも死に至ることを知らされている彼らは、死から逃れるために必死でゲーム内を生き、勇者軍のプレイヤーを狩り続けている。

当然、中には拒否する者や積極的にプレイしない者、更には歯向かう者もいるが、現実世界での拷問を受けることにより、例外なくGMに屈する形となり、従うことで生きながらえているというわけだ。

元々、一つのIDでは二回しか死亡することができないのは公式サイトでも公表済みだが、現実世界に影響があることは伏せられているので、今もなお現実世界ではEGOのIDを手に入れ、脳細胞にウイルスを送り込まれる一般人が増え続けている。それはつまり、魔王軍のプレイヤーがウイルスから解放される可能性は日に日に少なくなっているということだ。

仮想世界での現実を目の当たりにして、オレは目の前が真っ暗になりそうだった。そんなオレの思考を気にした様子もなく、レツカスがカラカラと笑いだす。

「だがよー、ルイピスタは俺たちとは違って囚人じゃねえんだろ？  
んじゃあ今すぐEGOからログアウトして、すぐに警察に訴えて  
くれれば問題解決だぜ、これで俺たちも死の恐怖から解放されるっ  
てわけだ」

そう言われてみれば確かに、オレは一般人の中で唯一、EGOの  
真実を知っている。

それに加え、今ならまだGMにも気づかれていないかもしれない。  
ログアウトを実行に移すなら、今だ。

「そ、そうだな！ オレがログアウトすれば、あんたらは勿論、勇  
者軍のプレイヤーも皆まとめて助かるんだよな？」

レッカスの言葉に希望を抱き、頬を緩める。

そうと決まれば、いつまでもこんなところにはいられない。ウイ  
ンドウ画面を出してログアウトのコマンドを選択するんだ。

右手の人差し指で左手の甲に触れ、知覚を感じ取るようにスライ  
ドしてみる。これがEGOに於けるウィンドウ画面の入出の仕方だ。  
ここで一つ、また新たな疑問が浮かび上がる。

EGOでは、知覚は認識されないはずだ。それなのに何故、オレ  
は指先の感覚から肌に触れる感触まで、しっかりと感じ取っている  
のだろうか。

「……どうかしたの？」

手の動きを止めたオレを不審に思ったのか、ロアが声を掛ける。

「いや、……なんでもない」

今はそんなことを気にしている場合ではない。

EGOの真実を伝えるために、ログアウトを実行に移さなければ  
ならないんだ。

「じゃあ、短い間だったけど……また、何処かで」

ありがとう、と言うのはおかしい気がした。現実世界に戻り、E  
GOの真実を世に公表したとしても、此処にいる奴らは囚人だ。死  
に至ることがなくなっただとしても、もう一度出会うことができるか  
は分からない。



だから、誰の目も見ずにウィンドウ画面へと視線を向け、ログアウトを実行に移した。

「……ん、……あれ？」

が、何も起こらない。

否、正確には異常な事態が発生していた。

「どうした、ログアウトの仕方が分からねえのか？」

いつまで経ってもログアウトしないオレを見かねたのか、レックラスが横に並び、ウィンドウ画面を覗き見る。

「えーっと……ログアウト、不可能？……なんだこりゃ」

ログアウトを実行に移すと、ウィンドウ画面にエラーが表示され、同時にログアウト不可能とのメッセージが浮かび上がる。

「ログアウト不可能って……どういうこと？」

レックラスに続いて、ロアがウィンドウ画面に目を通す。次いで、ローランドも同じく。

「ちょ、ちょっと待ってくれよ、ログアウトできないってことはつまり……このままだとオレ、永遠にEGOの中にいなけりやならないってことなのか？」

「残念だが、そういうことになるだろうな」

溜息を吐き、ローランドは顔を俯けた。

「……そんなバカな……な、なんでこんなことに……」

何度実行に移しても、ログアウト不可能のメッセージが浮かび上がってくる。

このままだと、オレは現実世界に戻ることができない。もしそうなってしまうえば、オレは勇者軍のプレイヤーだけでなく、此処にいる魔王軍のプレイヤーにも勝る最悪の状況に陥ってしまったことになる。

ゲーム・マスター

「この状況から察するに、キミは既にGMに気づかれている可能性が高いと言えるだろう」

「つまり、オレがログアウトできないのはGMの仕業ってことが……」

……」

ウイルスには感染しているものの、オレ以外の全ての人間は現実世界に戻ることができる。

だが、オレはEGOを完全制覇しなければ戻ることすら不可能だ。……いや、たとえ完全制覇したとしても、ログアウト可能になるか否かはGMにしか分らない。<sup>ゲーム・マスター</sup>言うなれば、今のオレは籠の中の鳥と同じだ。

「……ルイー、あなた現実世界では一人暮らしなの？」

ロアが、オレの名を初めて口にする。

ほんの少し驚いたが、すぐに言葉を返す。

「母さんと二人暮らしだ。……でも、それがどうした？」

現実世界におけるオレの状況を把握し、ロアは安堵の表情を浮かべた。

「それなら、あなたのお母さんが現実世界でああなたの体に触れさえすれば、EGOのシステム上、強制的にログアウトするから問題ないわ」

「その手があったか！」

なるほど、確かにそれならログアウト不可能な状態に陥ったとしても、強制的にログアウトすることができるかもしれない。母さんが仕事から帰ってくるのは夕方頃だから、二時間も経てばオレの異変に気づいてくれるはずだ。

「そう上手くはいかないだろう」

しかし、水を差す人物が一人いた。それはローランドだ。

「相手は人の命を弄ぶことに何の躊躇いも持たないGMたちだ。<sup>ゲーム・マスター</sup>強制ログアウトすらも不可能となっていて不思議ではないな」

城内が、しんと静まり返る。

「……ま、まさかそこまでは……」

しない、とは言い切れない。人を死に至らしめるシステムを生み出した奴らが、抜け道を残すほど間抜けではないはずだ。

ローランドの言葉に愕然とし、オレはその場に立ち尽くす。陽気な喋り方のレッカスが話しかけるのを躊躇するほど、今のオレは落

ち込んでいた。

けれどもE G Oは、絶望に浸る時間すらも与えてはくれないらしい。

「ぐっ、なんだ、この音はっ」

突如、何処からともなく振り時計の音が鳴り始めた。天井から否、空から聞こえてくる。

周囲がざわつき、囚人たちの喋り声が室内に響きだす。ローランドを含め、ロアとレツカスも何が起こっているのか分からないようだ。

窓のそばに近づき、暗闇に埋もれる空を見上げてみる。とここで左手の甲が淡い点滅を二度繰り返す。これはE G Oの中でメッセージを受信した時の合図だ。此処にいる奴らには例外なく、メッセージが届けられているようだ。

隣に並んで窓の外を眺めていたロアは、すぐにメッセージを確認し、オレにも見えるように甲の位置を変える。そして、オレは目を疑った。

【件名】生まれたての魔王を殺せ

【本文】全てのE G Oプレイヤーにお知らせ致します。

つい先ほど、魔王軍の陣地にて、魔王が誕生致しました。

魔王の名は、ルイピスタ「タスピール」。生まれたての魔王です。

これに伴い、E G Oでは、本日二十二時より魔王討伐クエストの開催を決定致します。

魔王討伐クエストへの立候補者の中から、最もステータス値の高いプレイヤーに挑戦

権が与えられ、魔王ルイピスタを相手取り、一対一の真剣勝負を挑むことができます。

魔王ルイピスタの討伐に成功した者には、クエストクリアの報奨金として、現実世界

において、E G O 開発本部より現金一億ドルが贈呈されます。魔王ルイピスタを討伐

する者が現れるまで、毎週日曜日の二十二時にて開催を予定しておりますので、魔王

討伐クエストへの参加をご希望の方は、こちらまでメッセージをお願い致します。

生まれたての魔王     ルイピスタ「タスピール。それは勿論、オレの名だ。

これは一体何の冗談だ。

「生まれたての魔王……ルイピスタ「タスピール……!？」

メッセージに目を通し、ロアがオレの名を呟く。現状を把握しているのはGM以外に存在しないだろう。何がどうなっているのか頼むから教えてくれ。

「……ルイ、あなたのメッセージを見せて」

「オレの? どうしてだよ」

聞き返すと、ロアは自身に届けられたメッセージに視線を向ける。「このメッセージは、魔王が生まれたことを知らせるために送られてきたものだから、もし仮にあなたが本当に魔王なら、あなたに届いたメッセージには何か別のことが書かれているかもしれないわ」なるほど、確かにロアの言うとおりだ。

魔王に対して、魔王討伐クエストへの参加を促すわけがないからな。

言われるがまま、オレは左手の甲を指でスライドし、メッセージを確認する。そして、

「……は、はは……っ、だからログアウトできないのか、オレは……」

空笑いが、現実を直視する。今この瞬間に我が身へと降りかかる不幸を受け入れたくはなくとも、たった一つのメッセージによって、無理矢理に納得させられてしまう。

【件名】魔王のIDを持つ者へ

【本文】ルイピスタ「タスピール様、おめでとうございます。」

あなたがご使用になられたIDは、魔王軍の魔王としてEGOをプレイ可能なIDと

なっております。他のプレイヤーとは異なる点が幾つかございますので、初めに、簡

単なご説明をさせていただきます。

魔王のIDを持つ者は、勇者軍のプレイヤーとしてEGOをプレイすることができま

せん。EGOへのログインが行われると同時に、魔王軍の陣地にある魔王の城の一室、

王の間へと強制転移されます。

公式には発表されておりませんが、魔王軍のモンスターの中にはプレイヤーの方も存

在し、あなたを含めた全ての魔王軍のプレイヤーは、EGOにおいて一度の死を体験

することにより、アカウントが消滅されるようにプログラムされております。

また、例外として、魔王のIDを持つ者がEGOの中で死に至った場合、その瞬間、

全ての魔王軍のプレイヤーが死に至ります。

あなたの配下となる魔王軍のプレイヤーと共に、王者の証を手に入れるか、または真

のクエストクリア条件を達成しない限り、あなたはEGOからログアウトすることが

できませんので、予めご了承下さい。

では、生まれたての魔王ルイピスタ「タスピール様。死に至る最後の日まで、EGOをお楽しみください。」

あまりにも理不尽で一方的な宣告に、つい、足の力が抜けてしまった。

そんなオレに肩を貸し、ロアが体を支えてくれる。みつともなくて涙が出そうだ。

「何が書いてあったの？」

ロアに見えるように、手の甲を傾ける。

そして、ロアもまた同じように、GMゲーム・マスターから届けられたメッセージを読み、愕然とした。

「……オレが死ねば、此処にいる全てのプレイヤーが……死ぬんだとよ」

生まれたての魔王、ルイピスタ「タスピール」。

生まれて初めてEGOにログインした、MMORPG初心者だ。

だが、そんな頼りがいのないオレの肩に、囚人たちの命が掛かっている。信じたくはないが、これが現実だ。あらがうことができない。

「お……おい、どうしたってんだよ？ 何かヤバいことでもあったのか？」

見る見るうちに青ざめていくオレとロアの表情によって、辺りが不安に包まれていく。

「ルイ、此処にいる皆にメッセージを転送して」

レッカスの声を聞き、ロアは息を吐く。心を落ちつけようとしているのだろう。

ロアは自分の手をオレの右手に重ね、コマンドの入力先を指し示していく。それにより、どうやらオレに届けられたGMゲーム・マスターからのメッセージは、全ての魔王軍のプレイヤーに転送されらしい。オレとロア、そしてレッカスを中心として、周囲がざわめき始める。

「ルイピスタが……俺たちの魔王だって……？」

信じられないものでも見るかのように、レッカスが視線をぶつけてくる。

それは憐みか、それとも絶望か。恐らくは、後者の方が色合いが

強いに違いない。オレが死ねばレツカスも死んでしまうのだからな。EGOをプレイしたことのない初心者に、自分の命を握られていると考えてみれば、誰もが絶望するはずだ。

「なるほど……、魔王討伐クエストの真の狙いが分かった」

そこに、ローランドの声が耳に届く。

転送されたメッセージに目を通したのだろう。

「キミが死ねば、私たちも死ぬ。そしてそれは、魔王討伐クエストにおいても例外ではない」

「……あ」

魔王討伐クエストの真の狙い、それは、

「EGOが稼働を開始してから一年が経過し、未だ死に至らず、もがき続ける囚人を」

一人残らず皆殺しにすることだ。

その言葉が木霊し、此処にいる全ての囚人が絶望に声を上げることができなくなった。

「……ロア」

そんな中、真っ暗に染まり始める視界の向こうで、オレはまた別のことを考えていた。

隣に寄り添い、微かに肩を震わすロアの息遣い、そしてその生温かな息の吹きかかる感触に、確かにオレは知覚を感じ取っていた。

エンドレス・ゲート・オンライン。この世界には、知覚が存在する。

それはつまり ……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7539x/>

---

エンドレス・ゲート・オンライン

2011年10月20日19時05分発行